

2025 年 6 月の総評に代えて 高橋修宏

大西日振れてパノプティコンの鐘

さいう（石川県）

「パノプティコン」とは、M・フーコーの著作『監獄の誕生』などのキーワードとなる全景望監視システムであろうか。最近では、ポップな歌詞にもなっている。「大西日」、そして「鐘」の措辞が、世界中に張りめぐらされた終末的な光景の手ざわりを暗示する。

空洞のからだを野辺に診てもらう

松下 誠一（東京都）

われわれの「からだ」とは、口から肛門までの「空洞」と言ってもよい存在だ。「空洞」であるがゆえに、外界から病気の原因となる異物が入りこむこともあるし、また「野辺」という外界の主体によって「診てもらう」こともできるのかもしれない。

全くの他人に比べ、  
家族には  
私を殺す理由が多い。

大嶋 碧月（石川県）

一読、ショッキングな印象が残る。だが、「家族」ゆえの軋轢や確執もあるだろうし、それが引き金となって「私を殺す」こともあるのかもしれない。とりわけ二〇〇〇年代に入ってから数多くの事件が、「家族」という閉域において起こっていたことを想起するとき、この作はリアルな手触りを伴って迫ってくる。

「右へ倣え」の日々のなか  
透明なコップは雨を溜めても裸

常田 瑛子（山口県）

「右へ倣え」が暗示するのは、どこか全体主義と呼んでもよい抑圧的な世界（あるいは、現在）かもしれない。二行目の「透明なコップ」は、そのモノ自体であると同時に、

そんな世界に生きる人間のイメージであろう。結語に置かれた「裸」が鮮烈で、印象的。

**青嵐あいつが鳥の司令塔**

**蝸牛（奈良県）**

「あいつ」と名指されたものの正体が明かされぬまま、「司令塔」の結語によって、どこか不穏なイメージが手渡される。「青嵐」の季語も効いている。さらには、A・ヒッチコックの名作『鳥』のエコーも。

**紙コップ以北のやけに白い手だ**

**桜庭 紀子（和歌山県）**

まず、「紙コップ以北」の措辞に驚かされた。ささやかな日常の情景でありながら、「以北」という言葉を持ち込むことで異和が生まれる。「やけに白い手」も、どこか妙に生々しい。

**金魚になれば許してくれる？**

**おかあさん**

**檜野 美果子（宮城県）**

何より「許してくれる？」の問いかけによって、発語主体の哀しみが届けられる。「金魚」とは儚く、美しく、鑑賞されるだけの存在の比喻だろうか。そんな存在を強いる「おかあさん」もまた、恐ろしく、そして哀しい。

**ぼんにゆいと言えば夏木になる獣**

**大西 美優（広島県）**

「ぼんにゆい」という舌足らずの不思議なオノマトペが面白い。「夏木になる獣」たちも、荒々しい存在というより、幼形のままの獣なのかもしれない。

空の色をうつして水の冷えわたる  
海がひとつの眼であることを

早瀬はづき（大阪府）

二行目の把握が見事。「海」に対して、どこか崇高でありながら実在感を伴って捉えられている。「海」が視ているものを暗示しながらも、さまざまな想像する余地を読者にもたらす。

兄ちゃんの貯金箱から  
五百円もらい  
募金に行ってきたって

あゆな（群馬県）

あっけらかんとした語り口には、罪の意識や疚しさなど感じられない。この冗談のような語り口による、私的な所有という窮屈さへの問いかけなのかも。

あたらしい黒子に気づいた日  
雨がやんだ日

波津 ゆみ（神奈川県）

一行目と二行目には、一見すると何の脈絡もない。だが、そこに自分なりの理由や意味を見い出すことにより、まったりとした日常に、句切りを入れ、生きてゆくことなのかもしれない。

深海によばれるように  
スロープをゆっくり降りる車椅子

森川 紬（福井県）

一読、M・ハネケの映画『ハッピーエンド』の終盤のシーンを思い起こした。自己に対する絶望か、世界への嫌悪か、あるいは海への回帰か、何もその理由は明かされぬまま、海へ「スロープをゆっくり降りる車椅子」の映像だけが、われわれを置き去りにする。